令和４年度　　リーダー職員研修会

日時：令和４年 11 月８日（火）13：00～17：00
場所：もやい館　３階もやいホール

司会　梅下局長
進行　保健課　東参事
※水俣病保健課より、業務内容の説明と手帳の種類及び支援の内容等について資料提供と説明あり。

研修１　水俣病に関する講話
「水俣病は恥ずかしい病気ではない」
講話　一般社団法人水俣病を語り継ぐ会　吉永利夫氏

・普段は、熊本県下の学校の先生たちや、保護者の皆さんに話をしたりしているし、水俣には外国からも研究者や宗教者がよく来られるので、その方達にも話をしている。
・熊本県内の小学５年生は、「水俣で学ぶ肥後っ子教室」に参加することになっている。水俣病資料館を見学し、語り部の話を聞き、環境センターを見学して帰るという行程。　※テーマは「人権・差別偏見」
・自分が水俣に来たのが 50 年ほど前で、当時は認定されるが補償はされない時で、申請するのが恥ずかしいと思う人も多かったが、なぜ、「水俣病を恥ずかしいと思うのか」について考えてみる。
・70 代や 80 代の人は恥ずかしいという気持ちがあるだろうと思ってはいたが、最近、大学生から「自分の出身地を言うのが恥ずかしかった」というのを聞いて、今の若い人達でもそうなんだと思った。
・最初は伝染病の扱いをされたが、２年足らずでうつらないことが分かったのに、（行政は）うつらないことをちゃんと否定しなかったし、魚を食べてはいけないとも言われなかった。
・30 年以上も前の話だが、水俣市民から、「水俣病の人は弱った魚を食べたからなのか？」と聞かれた。その人がそう聞いた理由は、自分も同じ水俣に住んでいて魚も食べるのに何ともないからだと思う。
・昔は、結婚を断られたり、「水俣」と名前がついていると「食べられるのか？」と言われたりしていたので、水俣という名前がついていることも恥ずかしいと考える要因だと思う。
・以前サッカーの試合の時に、水俣の学生が相手チームから差別的な発言を受け問題となった。一番、被害の多い地域にある袋中学の生徒に対してはそういった発言はあまり聞いたことがないのは、学校名に「水俣」とつかないからだと思うので、そういった面からも「水俣病」という病名に対して、恥ずかしいと感じるのかなと思う。

・また、チッソの正面玄関前で座り込みをしたり、会社に押しかけて問題になったり、裁判等もあり、「補償金の支払いの為にチッソが倒産するんじゃないか」と住民は心配し、被害者は「お金欲しさ」だと言われたりして、嫌な思いをすることもあった。
・病名を変えた方がいいのかと議論に上がるが、水俣病で闘ってきた人達や関わってきた人達は変えなくていいと思っている人も多い。
・これも以前の話で、「もう、よかろう」と言われたこともある。いつ水俣病は終わると思うか？被害者が全員亡くなるまで待つのか？世間が忘れるのを待つのか？「水俣病」という名称を変えるのか？私は、水俣の人達は、もっと水俣病に向き合うといいと思う。自分で考え、確かめることは必要。
・環境問題を考えるという観点から、修学旅行を誘致することを 30 年前に始めたが、学校の先生方は、水俣病についてよく調べているし、水俣に対して好意的であり、世界的にも「水俣」を知っている人は多いと思う。そういう実態を水俣市民に知って欲しいと思う。
・どうすれば水俣に自信が持てるか？　※参加者に意見を発表して頂く。

研修２　「ホワイトボードミーティング」
講師　熊本県企画振興部交通政策・情報局交通政策課
緒方 竜二氏
（補佐：白梅の杜　生活相談員　北園 道樹氏）

・ホワイトボードを活用して進める会議の方法。2003 年に開発され幅広い分野で取り組まれている。

5 つの特徴

1. ホワイトボードに意見を可視化
2. 進行役をファシリテーター、参加者をサイドワーカーと呼ぶ
3.「ホワイトボード・ミーティング質問の技カード」で深い情報共有を進める
4. 話し合いに「発散→収束→活用」のプロセスを作り、色をわけて書く
   ↳ 発散（黒）…意見をドンドン出し、オープン・クエスチョンで深める（情報共有）
   収束（赤）…軸を決めて、出た意見を方向づけ　（意見の構造化）
   活用（青）…具体的な行動や活動計画を決める　（行動計画・結論）
5. 6 つの基本会議フレームを活用。熟練したファシリテーターは目的に応じて組み合わせる。

・会議では、サイドワーカー（参加者）が７割、ファシリテーター（進行役）が３割の役割配分。
※本日は、ベーシック（3 級）定例進捗会議・役割分担会議を体験。

本日のルール

○　失敗・間違いＯＫ
○　くり返し練習

【ホワイトボード・ミーティングの基本的な考え方】

・体に体力があるように、心にも「体力のようなもの」があり、心の体力が温かいと自分の力を発揮して生きやすくなる。心の体力は色々なもので温められるが、一番大きな影響力を持つのは日常のコミュニケーション。

・ホワイトボード・ミーティングは、相手の意見を書くことで承認されるので、どんな意見も要約せずにファシリテーターが書き「ホワイトボード・ミーティング質問の技カード」にある９つのオープン・クエスチョンで第４段層まで情報を深めると、愚痴や不満も「貴重な意見」に変わる。

・「発散→収束→活用」で話しあいが構造化され、思考の整理や対話が進み、具体的な結論や行動計画が決まる。

・何度も練習を重ねると、ひとりひとりの力が発揮されるエンパワーメントなチームになる。

質問の技カード

○９つのオープン・クエスチョン

１．～というと？　２．どんな感じ？　３．例えば？　４.もう少し詳しく教えてください

５．具体的にどんな感じ？　６．どんなイメージ？　７．エピソードを教えてください

８．なんでもいいですよ　９．ほかには？

○８つのあいづち

１．うんうん　２．なるほど、なるほど　３．わかる、わかる　４.そうなんだぁ

５.へえ　６．だよねえ　７．それで、それで　８．そっかあ

○クローズド・クエスチョン（情報を明確にする質問）

１．数量　（日時・回数・価格など数字で表すこと）

２．固有名詞　（人名・商品・事業所名・場所など）

※演習風景